



写真甲子園に出場した写真部の生徒たちにとって、3月に起きた東日本大震災は、デジタルカメラの新しい可能性に気づかせてくれました。心をつなげる手段をつくったのです。農家のお母さん、学校の先生、学校の友達、登校途中の小学生、消防職員、警察官、アメリカ軍の震災応援隊員……。写真に写ってはいなくとも、そこにはカメラを構え、写真撮影を依頼した高校生もいます。この運動の中に入れて活動したことで、新しい自分発見が出来ました。



「テレビで東日本大震災のニュースを見て、その画面の印象がすごかった。北海道は震度3あったそうで、その時6時間目の授業中だったけれど、ぜんぜん気づかなかった」。

東日本大震災当時を振り返って、平穏な環境にいた自分と、被災地の被害の大きさとのギャップが衝撃的だったそうです。

「写真甲子園にボランティア参加して、東北から出場した生徒と話したんです。そうしたら、石巻の子(石巻好文館高校)から3日間家に帰れなかった、と聞きました。話してみるとみんな普通の高校生だし、明るく楽しく話せましたし、ここまで復興していることもうれしく感じた。だから自分も、機会があれば写真の活動を通して、ほかの人よりももっと活動したい、と思ったんです」。

写真甲子園を終えた8月、東川、東神楽町内で、自らカメラを手に、復興応援メッセージを持った写真撮影を頼んで回りました。

◇ 応援メッセージ写真の撮影活動を

始めたきっかけは、写真甲子園で宮城県柴田農林高校写真部顧問の山下学先生から受けた誘いの一言。

去年、記録係のボランティアとして柴田農林高校の担当になり、今年も最終日に記録係として同行したことで馴染み同士になっていました。

「自分が撮り始めた時には全国で800枚ほどの写真が集まっていた。それが3カ月間で2千221枚まで伸びた。これってすごい。これらもほとんど伸びていってほしい。終わらない、終わらせちゃダメ。つなげる!」「こういう活動が当たり前になってほしい」。

「高校に入ったら、文化系のクラブ活動がいい」と写真部へ。「お父さんが昔のフィルム一眼レフカメラを持っていて」と写真に親近感を持っていました。

3人兄妹の末っ子。活動を知って、忙しくて家に帰っても余り会えないお兄さんから、わざわざ「頑張れよ」と携帯メールが届いたそうです。それがなによりうれしかったようです。

90cm四方の大パネルに最大12枚の写真が組み合わせてあり、そのパネルは会場内に50枚あります



高校生たちが使ったメッセージ満載のスケッチブックも展示



1700枚のメッセージ写真を1枚の大パネル(90cm×180cm)に展開して「つながり」を表現した作品



展示設営のワークショップ後、参加者全員が美瑛で撮影会(11月5日)



復興プロジェクトで文化ギャラリーで研修した全国7校の高校生

むらかた あかね 村形 明音さん/東神楽町

東神楽町出身、17歳。北海道東川高校2年。東川高校写真部、11月5日から同月24日まで町文化ギャラリーで写真展を開いた「高校写真部による東日本大震災復興応援プロジェクト」に参加。東川、東神楽町内を回って震災復興メッセージが入った町の人々の写真を撮影、全国2,221枚の写真の中に登場しています。展示設営ワークショップにも参加。同プロジェクトのスタートは、埼玉栄高校写真部の高校生の活動が発端。宮城県柴田農林高校写真部が全国各地の高校写真部に呼びかけ、27校の高校生が参加。現在も各地で写真展開催、応援メッセージ付き写真の撮影が増え続けています。同プロジェクトは、CIPA=(社)カメラ映像機器工業会と(財)日本財団が立ち上げた「CIPAフォトエイド」基金の支援を受けました。(4ページ、まち・タウン参照)